

〈修士論文要旨〉

古墳の周濠の意義

高 島 敦*

【研究目的】

我が国において古墳時代には、その名が示すように約350年もの間にわたって、汎列島的に高塚墳墓がこぞって築造された。このような現象は何も我が国だけにあらず、中国・朝鮮などの東アジア諸国、さらにはエジプトのピラミッドのように世界各地でみられるものであり、それは国家形成初期段階に共通してみられる現象、すなわち人類の歴史過程の一端として捉えられるのである¹⁾。

その一方で、日本の古墳は他と比べ異彩ともいべき特色が著しくみられる。例えば、墳丘形態にあっては前方後円墳・前方後方墳・帆立貝式古墳・円墳・方墳など実に様々な形態がみられるし、墳丘上には人物・器財・動物などを象った素焼きの土製品の埴輪が樹立されるなど、いずれも日本独自の行為である。それらは、被葬者の身分や業績・個性を世に表現・表示するものであり、外部に誇示するものであった。広瀬和雄氏²⁾がいうように、まさに古墳時代は「見せる王権」「可視的な国家³⁾」として捉えられるのである。そして、そういう意味において、古墳にとって付加的要素（外部施設）の位置付けは大きいものであった。誤解を恐れずあえて述べるならば、古墳の発達はその付加的要素の発達に他ならないのである。

周濠もまた、その付加的要素の一つである。周濠は、単に墳丘と外界とを画するものではなく、幾つもの要素により世に被葬者の権力・個性を表示するものであったと考えられる。

本稿では、このような古墳の周濠の意義を明らかにすることを目的としている。

【章立て】

本稿の章立ては、以下の通りである。

はじめに

第一章 古墳の周濠研究の概要

第一節 研究史と研究課題

第二節 語句の定義

第二章 古墳の周濠の視覚的効果

第一節 水濠の特質と意義

第二節 周濠内の遺構・遺物—周濠の庭的要素—

平成18年度 *文学研究科文化財史科学専攻

第三章 墓域表示としての周濠

第一節 周濠の形態

第二節 周濠による古墳の相互関係—共有周濠と重複周濠から—

第四章 区画施設としての古墳の周濠

第一節 多重周濠の概念

第二節 多重周濠の分布と時期

第三節 多重周濠のあり方

第四節 多重周濠の性格

結章 古墳の周濠の意義—周濠の変遷過程から—

おわりに

【古墳の周濠の意義—その変遷過程から—】

〔0期〕周濠成立前夜

箸墓古墳で前方後円墳が成立する以前、いわゆる纏向型前方後円墳の段階には周濠は成立していない。纏型前方後円墳の典型例とされる纏向石塚墳丘墓では、後円部側が幅約20m、深さ約2.5mもの濠状遺構が周囲に廻らされている。その規模からして、これこそが水を湛えた濠、すなわち周濠の起源であるとする復元案がある。しかし、それでも前方部側の周溝の幅・深さは後円部側のそれに比べて貧弱なものであり、これは墳丘構築を意識した掘削法に他ならない。周溝内に堆積した水成堆積層も本来的に水を湛えるべく湛えたものではなく、結果的に水が溜まった状況であったと考えられる。そのような光景が次ぎの段階に成立を迎える周濠を創出する上でのヒントとなった可能性は十分にあるが、この段階では弥生時代の墓制である方形周溝墓の要素が強いものである。そして、それは前段階からの発展はみられるものの、周囲を掘削することにより墳丘を構築し、墓という空間を創り出す区画の性格をもつものであった。

〔I期〕周濠の成立

行燈山古墳で周濠は成立を迎える。成立段階の周濠は、墳丘が丘陵斜面を利用することから、比高差を解消するため数箇所に渡土堤を設け水平面を維持する、いわゆる階段状周濠の形体をとる。

周濠成立の背景には、古墳そのものの性格に関わるものと考えられる。すなわち、古墳という構造物がそれまでの単なる墓から政治的シンボルとしての要素をより強めたことに起因する。墳丘上には円筒埴輪による表飾、家・盾・蓋などの儀礼具を象徴化した器形埴輪によって被葬者は自身の権力・業績を誇示した。ここに、古墳が“見せる”を第一義的な性格として誕生したことが垣間見られる。そして、水を湛えた周濠もまた大和の王の瀛瀛王的性格を象徴化したものであることが考えられるのである。周濠の成立は古墳の本質、そして大和王権の構造的特質を知る上で重要であることがいえるであろう。この段階において周濠は、「区画性」に加え「視覚的効果」の性格を持ち合わせるものであった。

【Ⅰ期】墓域の觀念の発芽

佐紀陵山古墳で釣鐘形周濠が成立する。これは、周濠の外形を精美なものに整え、墓の範囲、すなわち墓域を意識したことが窺える。この段階から墓の範囲が墳丘の外側、周濠・外堤により区画された領域まで含めた認識が始められたとも考えられるであろう。Ⅰ期とⅢ期との過渡期にあって、それほど飛躍的な発展はみられないものの、墓域の認識が発芽したことは画期として捉える必要があるであろう。

【Ⅱ期】周濠の一大画期

津堂城山古墳で広大な同一水平面周濠、周濠の外側にさらに周濠を附設した多重周濠が成立する。前者は、河内平野における治水事業と、それと密接な関係をもつ渡来先進技術の導入によるものである。そして後者は、墳丘付加的要素の外部化とも関連するが、第一義的な要素は、他者との差別化、すなわち大和における五社神古墳、佐紀石塚古墳に対しての津堂城山古墳の被葬者による機知である。また、周濠内には水鳥形埴輪や州浜などによって水辺の景観を表現した鳥状施設が設置される。そこには遊び心・庭的要素が見受けられる。そして、そのことは周濠の視覚的効果が大きく発展し、さらに周濠（内）が古墳の一部として完全に認識され、墓域としての性格を確立したことを示すものである。この段階以降、こうした周濠のスタイルが主たる古墳に引き継がれるものとなり、そういう意味で当段階は周濠の一大画期として呼べるであろう。

【Ⅲ期】周濠の最盛期

誉田御廟山古墳、大仙古墳の段階で周濠の発展はピークを迎える。これは、墳丘の規模の拡大からしても自然のことで、まさに当該期が周辺施設など諸要素を含めた古墳の最盛期にあるといえるのであろう。外堤には多数の人物・動物・器財形埴輪が配置されるようになり、古墳の施設の外部化に伴い大仙古墳では三重の周濠が備えられることとなる。また、陪冢の成立によって、個別の古墳（主墳と従属墳）との関係が重複周濠という形で表現された。さらに、前段階からみられるようになる帆立貝式古墳が墳形の一つとして定着し、円筒埴輪の規格差も著しいものとなる。それに伴い、周濠形態においてもバリエーションが多様化し、階層性の要素加えることとなった。この段階は、前段階の要素を大枠では受け継ぐかたちは採るものの、諸要素において大きな発展を遂げるのである。

【Ⅳ期】周濠の衰退

前段階に最盛期を迎えた周濠は、畿内の主要古墳においては若干の衰退をみせ始める。前の山古墳では、外側の濠の規模が著しく縮小し、外堤外区画濠となる。一方、地方各地においては中小規模古墳の増加、階層の重層化によって多重周濠の拡散化、周濠形態の多様化が著しくなる。また、関東における東国型埴輪文化の発芽に関連して地域性が見受けられるようになる。

この段階では、畿内においては周濠は衰退をみせ始めるが、それとは反対に地方においては周濠の最盛期を迎えるのである。

【Ⅵ期】視覚的効果の終焉

畿内の大規模前方後円墳では、今城塚古墳の段階で広大な同一水面の周濠、縮小傾向にあった多重周濠が復古をみせるものの、白髪山古墳や高屋城山古墳、平田梅山古墳などではⅡ期の佐紀陵山古墳でみられたような渡土堤によって同一水面を保つに止まり、水を湛えることは確保するが、構造上・視覚的には衰退したと言わざるをえない。さらに、五条野丸山古墳に至っては、墳丘拡大に伴い周濠・外堤は壮大なものとなる一方、もはや水を湛えようとする努力はされなくなる。埴輪の終焉と共に、ここに水を湛えるといった視覚的効果は失われたといえるであろう。そうしたなか地方、とりわけ関東地方では当該地の特質から多重周濠の採用が継続され、むしろ著しい状況を示すこととなる。

【Ⅶ期】周濠の終焉

前方後円墳終焉後、奈良県石舞台古墳や大阪府塚穴古墳では空濠ではあるが依然と規模の大きな周濠・外堤が設けられる。墓域の観念は埴輪・前方後円墳が終焉した後も継続されていたことがそこから窺えるのである。しかし、そのような状況も次第に姿を消すこととなる。そこにはすでに古墳によって権力を誇示するといった時代の終わり、すなわち国家形成初期段階の終わりを意味するのかもしれない。

このように、古墳の周濠は単に墳丘と外界とを区画するだけでなく、視覚的効果による権力誇示・個性表現、区画による他者との差別化により、諸王・常人・外界から古墳を隔絶したのである。そして、それぞれの要素は、政治・文化などの社会情勢を背景に付加、発展を繰り返すこととなるのである。

【総括】

本稿では古墳の周濠の意義について、周濠のもつ様々な要素から述べた。

まず、古墳の周濠の視覚的効果について、日本特有の水濠にみられる背景と周濠内における各種施設の状況を述べ、その特質と意義を明らかにした。これは、古墳が単なる墓ではなく、“見せる”施設であるという古墳の本質に関連することであり、周濠の視覚的効果もまたその一つであるとみた。水濠は被葬者の治水王的性格を、周濠内の各施設は被葬者の生前住んでいた居館や執り行った祭祀の施設の状況を移植したもので、さらにそれらは遊び心や演出によって庭的要素をも持ち合わせたものであり、被葬者の実力と個性を表現したものであった。

また、周濠（周堤）が墓域を表示するものであると考え、その形態や在り方について述べ、周濠形態の階層性や古墳相互間の関係性について提起した。これも古墳が墳丘形態によって被葬者の身分を表示すると同じように墓域においてもそうであるとみたのである。

次に、区画施設としての周濠について周濠を二重、三重にめぐらした多重周濠を取り上げ、その性格について明らかにした。これは、従来は大王墓や地方の大首長墓などの特有階層における特別な施設であると考えられてきたが、決してそうではなくあらゆる階層において見られ、それは他者との差別化により採用され、その選択は被葬者の手中にあると考えた。そしてその背景に

は当該期の政治構造の様相がみられるのである。

本稿のねらいは、第一には周濠の在り方から古墳の本質を明らかとすることにあつた。前方後円墳という壺形の墳丘や形象埴輪の意義の解釈などから古墳がこの世に創出された他界空間(「他界の王宮」)といった見方がある⁴⁾。しかし、周濠の視覚的効果やその他の各種施設との関連性から、古墳は被葬者の権威を表示する政治的モニュメントとして築造されたに違いない。周濠が日本にのみ見られるのもそういった背景からであろう。

本稿の第二のねらいは、政治構造についてそのあり方に迫ることである。これは周濠形態の階層性や多重周濠から、古墳時代の支配体制・政治構造が決して一律なものではなく、それぞれの地域によって混沌とした状況を示すものであることを導き出すことができたと思う。

当該期の政治構造を理解するには、それぞれの地域内・古墳群中のより詳細な検討が必要であることは言うまでもない。また、古墳による検討だけでなく、それぞれの古墳と被葬者の住んだ居館やその麾下にある集落などとの総体的な研究が必要である。そのような点を踏まえ、今後も大方の教示を受けて古墳時代の政治構造について検討を続けていきたいと思う。

注

- 1) 都出比呂志『王陵の考古学』岩波書店、2000
- 2) 広瀬和雄『前方後円墳国家』角川書店、2003
- 3) この語句自体には筆者は賛成できない。「国家」という語が当該期の体制に相応しいとは考えていないためである。
- 4) 辰己和弘『古墳の思想—象徴のアルケオロジー—』白水社、2002